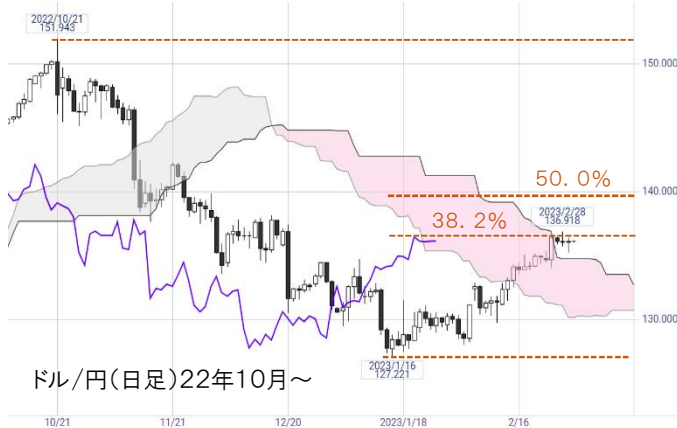


■ 2月分の米指標は1月分ほどには強くない！？

前回更新分の本欄でも触れたように、ドル/円は足元で一目均衡表の日足「雲」を上抜ける格好となり、昨年11月下旬に日足「雲」を下抜けて三役暗転（陰転）となって以来の『三役好転（陽転）』パターンを完成させた。

また、今週28日には一時136.92円まで上値を試す場面があり、左図にも見るとおり、昨年10月高値から今年1月安値までの下げ幅に対する38.2%戻しに到達している。



次の上値の目安となり得るのは、50%戻し=139.60円ということになるが、その手前に31週移動平均線（31週線）が位置しており（現在は137.78円）、同水準が当面の上値抵抗となる可能性もあるものと心得ておきたい。

振り返ると、2月に発表された米経済指標は大方が強めの結果を示し、米連邦準備理事会（FRB）のタカ派寄りの姿勢を援護するような格好となった。その結果、市場も徐々にFRBの見立てに歩み寄らざるを得なくなり、基本的にドルは強含みでの推移を続けた。そのため、2月はユーロ/ドルも弱含みの展開を続けることとなったが、62週移動平均線（62週線）が位置するところまで下落したところで、ひとまず下げ渋る動きとなっている。

昨日（1日）も、アジア時間に発表された中国のPMIが強い内容だったことを受け、欧州時間入り後に欧州債利回りが上昇し、一旦はドル売り・ユーロ買いの流れが強まったものの、2月の米ISM製造業景況指数が些か強めの結果だったことを受けて、ドルは買い直された。ドル/円については「下に往って来い」の格好となり、なおも市場はドルの強気材料に対してやけに敏感であると再認識させられた。

ただ、今回のISM製造業景況指数は「景気指数」が前回分より若干上昇したり、「新規受注」が予想外に盛り返したりしていたとはいえ、依然として「景気指数」は50を下回る水準であり、「雇用指数」も悪化していた。つまり、文句なしに強い数字だったわけではない。

かねて言われてきた通り、2月に発表された「1月分」の指標結果は諸々の理由によって“やや出来過ぎだった”との感もあり、市場関係者の間でも「3月に発表になる『2月分』は1月分ほどには強くない」と見る向きが少なくないようである。

2月の市場では、一部から「フェデラルファンド（FF）金利の誘導目標が最終的には6%に達する」などという声も聞かれていたが、果たしてそうか。この3月、4月に発表される指標結果を目の当たりにして、再度、市場の見立てがハト派寄りに修正される可能性が高いと個人的には見る。

もちろん、目先は今しばらくドル強気の流れが続いておかしくない。前述したとおり、ドル/円には一定の上値余地が見込めるし、ユーロ/ドルについても1.05ドル割れあたりまでの下値余地が見込めないわけではない。前回も述べたように、仮に62週線を明確に下抜ければ、昨年9月安値から2月初旬につけた高値までの上げに対する38.2%押し水準である1.0460ドルを試し可能性もあろう。とはいえ、少し長い目でドルの上値追いに対しては、そろそろ慎重になっておく必要があると思われる。

（03月02日 11:15）